

# 1990年代以降の日本型雇用 頑強な長期雇用と変化の萌芽

Texas A&M University

小野 浩

1990年代の「失われた十年」を契機に、終身雇用の衰退・崩壊など気軽に言われるようになった。他方、実証研究の結果を見る限り、長期雇用の推移と方向性を決定的に裏付ける研究は少ない。終身雇用は衰退しつつあると示される一方で、依然として健全であると結ぶものもある。

本章では、まず先行研究のレビューを元に、終身雇用制度の推移と行方を体系的に整理する。Ono (2010) が指摘するように、終身雇用の推移は、定義次第で変わってくることを改めて強調する。労働市場のフローとストックという尺度を元に、終身雇用がどのように変貌してきたかについて考えてみたい。

終身雇用の対象となりうる労働者のストックは確実に減っている。また、終身雇用の対象となりうる内部の労働市場への入職率も低下している。一方で、既に終身雇用の下で働いている労働者の離職率は、変化していない。これらの動向は、長期的には終身雇用が衰退していく方向性を示している。

章の後半では、終身雇用制度をこの先維持していくことは困難であるという点について考えてみたい。